

ドンキレクの近代主義者

— 部落長のアーマッド —

矢野 暢

1

ドンキレク部落の部落長（ブーイバーン）のアーマッドは、変わり者だ。もともと、部落民は、かならずしもかれを変わり者とはいわない。気性が激しく、反応がす速いかれの性分を恐れてか、表面上は、かれにけちをつけるものはだれもない。しかし、外部のもの日には、かれは、やはり、どこことなく変わっている。毎日、夕方になると、かれは、自宅から少し離れたゴムの畑に行き、ヤシの実のわんに米を入れて、鶏についばませる。ついばむ鶏はいつも1羽だけである。1羽の鶏を可愛いがる情景には、なんともいえ



写真1 鶏にえさをやるアーマッド

ない無邪気さとおかしみとがある。このアーマッドが、ある日、とんでもないことをしてかした。さすがの部落民も、そのときは、かれを変わり者と呼んではばからなかった。ドンキレクの第5集落の西のはずれに1本の大きなマンゴーの木が生えていた。この木は、ドンキレク住民全体の共有財産だった。なぜなら

ば、この木にむかって kho phon（願かけ）をしたら、それがかなえられるからだ。アーマッドが、なにを kho phon したかはわからない。しかし、どうにも思うようにことが運ばなかったのだろう。かれは、その日、愛用のなたで、その神聖なマンゴーを切り倒してしまったのだった。住民は、かれを変わり者と呼んだが、かれをとがめようとはしなかった。なぜなら、かれと同じように、空しくはかなく kho phon した経験は、だれにもあったからだ。

アーマッドは、いうまでもなく、イスラム教徒である。そのくせして、酒は飲むし、祈祷もずるけがちである。だからドンキレクのトイマム（導師）は、かれを、かねてから嫌っている。トイマムにいわせると、アーマッドは、徳も神の祝福もなにもない可哀想な男なのだ。この無法者の部落長が、神聖な木を切り倒したことは、ドンキレクの歴史のうえでは、ひとつの画期的な事件であった。といっても、なにも神聖な木が1本失われたからというわけではない。神聖な木を切り倒した事件は、先例があるのだ。かつて、第4集落に、1本の巨木が繁っていた。住民は、phi が宿っていると信じ、畏れていた。ある男が船の材料に売ろうとして切りかけたが、なたの刃が幹にはねかえされ、どうにもならなかったという。この木は、結局、メッカから帰って来たひとりの若い男に、すいすいと切り倒されたという。その男は、いま部落の子供たちにコーラン読みを教えているマーン先生である。マーンは、部落きつてのインテリだ。そうした神聖な木を切り倒せるのは、マーン先生のような、宗教的な徳を積んだ人でなければいけないはずなのに、のんだくれの部落長が、それをすいすいと切り倒したのだから、みな一応びっくりしたのだった。

住民は、ふつう、アーマッドのことを、ナーイバーン・マッドと呼ぶ。マッド部落長という意味だ。あるいは、マッド・ナーイバーンともいう。マッドという名前は、ドンキレクではざらにある名前だし、いちいち、マッド・ロンシー（精米所のマッド）とか、マッド・スワンソム（みかん畑のマッド）とか、形容句をつけて区別しなくてはならない。形容のつけ方が天才的にうまい男がひとりいるがそのかれがアーマッドを、マッド・ナーイバーン（部落長のマッド）と呼ぶので、他の連中もそれに従って、そう呼んでいる。アーマッドの親父もかつて部落長だった。しかし、あるとき強盗に射ち殺されて死んだ。要職の継承が世

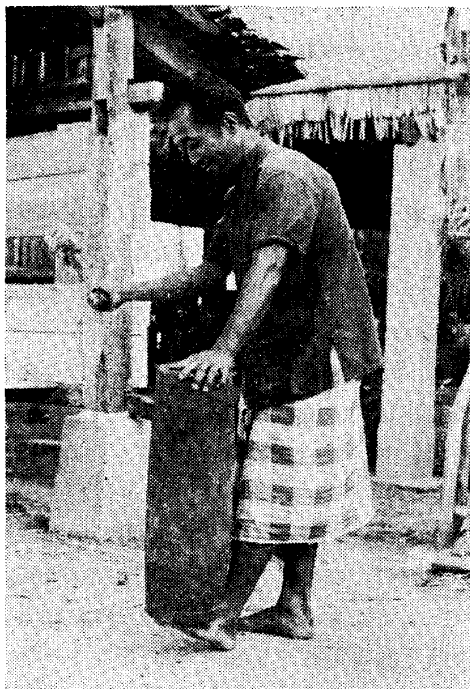


写真 2 太鼓を叩いて住民を召集するアーマッド

襲化する傾向をもつドンキレクでは、父が死んだあと、成人したアーマッドがなかば自動的に部落長になれても不思議ではなかった。アーマッドは、だから、部落の「名門」の血をひくわけだ。かれの苗字はビンドゥレムである。ビンドゥレムというのは、部落でもっとも多く数えられる苗字だ。タイ国で苗字制度が一般的に採用されたのは、ラーマ6世の御代1916年のことだが、その折、郡役所からの命令で苗字をつけるよう頭をひねったあとで、部落のいちばん偉い一族が、このビンドゥレムを選んだといわれている。タイの農村では、イエの系譜は、社会のさほど重要なファクターではないので、苗字にこだわるのは不賢明かも知れないが、それでも、血縁関係を知るうえでのひとつの手掛かりにはなる。ドンキレクでは、苗字の問題が案外話題になることが多い。それというのも、南タイ社会の特徴として、かなり閉鎖的・孤立的な性格をもっていたドンキレク部落に、社会的流動性の高まりとともに、他の社会の人間がはいり込んで来るようになり、それと共に、耳慣れない苗字が部落に入って来たからだ。プアサレとかビンヌイなどは、かつてここにはなかった苗字である。また、仏教とイスラムとが混在するタイイスラム地帯であるだけに、仏教徒との通婚もままおこなわれ、その結果、本来仏教徒がつかった苗字もはいって来ている。部落民の一部がつけてい

るサイバクディー、ダムシーとかテョーブンガームとかは、そもそもイスラム教徒の苗字ではない。

2

アーマッド・ビンドゥレムは、その点、生粋のドンキレク子なのだ。このかれが、酒をのんだり、kho phon の木を切ったりして、部落古来の約束事にそむきがちであるのは面白い。アーマッドには、本妻のほかに、第二妻がある。第一妻と第二妻とはいたって仲がいい。なぜなら、アーマッドが、待遇一切平等のルールをきちんとまもっているからだ。かれは、5日交替で泊り家を移している。ドンキレクでは、第二妻をもつばあい、1日交替がふつうで、5日交替というルールは珍しい。かれは、第二妻とのあいだに、一女をもうけている。この娘は、髪に野花を飾ったりする趣味のいい美少女なので、村の若物に評判がいい。もっとも、木登りも得意である。去年の秋のこと、トイマムの息子がこの娘にいたずらをしかけて失敗、そのことがアーマッドの知るところとなって、トイマムとのあいだがますます剣呑になった。アーマッドは、部落長だけあって口が達者だし、きまり文句をいっただけのムスリムの導師ではたち打ちできない。頭の回転が早い上に、思ったことをすばしば口に出す。トイマムは祈禱堂での大事な演説のときには、きまって足をがたがたふるわせる気の弱い男なのだ。

国家全体として、本来的な形でのムスリム教団組織が成立していないタイ国では、ひとつひとつの村落単位でのトイマムの役割が、たいへんな比重をおびている。タイでのムスリムの組織化は、内務大臣→県知事→ムスリム県委員→トイマム、という具合になっていて、政治的統合の趣旨が先に立っている。ムスリム県委員にしても、トイマムと内務省機構とのリエゾン機



写真 3 ザカットを受けるトイマム

能を働くだけの存在でしかない。すべてが政治的なのである。そこで、ひとつひとつの村落レベルのトイマムが、大きな役割を働かねばならないことになる。トイマムがしっかりしているところでは、村の宗教的秩序は立派な規律をもち、しっかりしていないところでは、規律が乱れてくる。

アーマッドとトイマムとの喧嘩は結局、アーマッドがトイマムをソクラーの町にある郡警察署まで連れて行き、そこで話をつけるところまでいった。トイマムは、そこでもがたがたふるえたとはいえない。かれは部落長に、息子のいたずらの慰謝金を払わねばならなかった。アーマッドは、トイマムがそれほどこわくないのである。

アーマッドは、月に1度郡役所でひらかれる村長・部落長会議には、村長（カムナン）のお供をしてかならず出席する。その日、かれは制服を身にまとい、いつも裸足のくせに靴をはき、村長の家まで4km歩き、村長の車に便乗して町まで行く。ドンキレク部落はパウオン村にある。パウオン村の村長は、カムナン・ヨクという名で親しまれ、ソクラー県の知名士のひとりである。ゴム園の農業労働者から叩き上げたたいへんなやり手で、いまでは不可能ということ知らない男になっている。ソクラー県第2の村長といわれるが、第1になれないのは、かれよりうわての村長がひとり健在だからだ。その第1の村長は、内務大臣プラパートと知己関係にあるのに、ヨク村長は、残念なことに、内務次官とかすかに知り合っているだけである。アーマッドは、このヨク村長を尊敬している。レトリックに満ちたさわやかな弁舌、社交性、威厳、たいへんな財産、それにスマートな近代性……経済合理主義一本で生きて来た偉大なる個人主義者ヨク村長の特性のすべてが、アーマッドを圧倒するのである。アーマッドには、それらの特性に感応するだけの素地があるのだ。部落長として、町に出る機会が人一倍多い。偉い役人に会う機会も多い。町に出ると、色彩映画もあれば、酒もある。タイの役人は、おしゃれだし、派手に遊ぶのが好きである。アーマッドは、これらのことどもをすべて知識として知っている。

郡役所の会議から帰ると、金曜日のプラチュム（部落民会議）で、郡からの連絡事項を集まった男衆にたえる。そのときの口調は、ヨク村長のそれに似ているし、威厳に満ちてもいる。プラチュムがおわると、



写真4 ドンキレクを訪れたヨク村長

形通り祈禱をおえ、家に帰り、酒をのみ、そして、日暮れになると、1羽の鶏にえさをやるのである。

3

ムスリムの社会は、聖典の教義の解釈によって秩序づけられる神政的社会である以上、どこのどんなちっぽけなムスリム集落にも、司祭者づらした「インテリ」がいるものである。南タイの片隅にささやかに位置するドンキレク部落にも、ムスリムのことならなんでも聞いてくれ、といたげな顔つきのインテリが数人いた。先代のトイマムを勤めて引退したトジレ爺さんは、私に面接を受けるたび毎に、むつかしいアラビヤ文字の本をとり出してきて、読んできかせてくれた。通訳として始終私につきそっていたのは、言葉のもっとも極端な意味において世俗的なサニット青年だったが、トジレ爺さんのこのお説教趣味をきらった。しかし、サニットの個人的評価の如何に拘らず、爺さんは、部落のインテリ中のインテリなのだ。いまのトイマムは、このトジレの女婿であり、トジレの威光でトイマムになれたのだが、やはり、ムスリムについての物識りで、本もかなりもっている。

これらのムスリム型の「インテリ」のほかに、一風変わった「インテリ」がひとりいる。暇があると茶店に来て、腰に差した小刀でひとの頭やあごを剃るのが趣味で、私もときどきかれにひげを剃らせた。石鹸などあろうはずもなく、じかにぞりぞりやるので少し痛い、かれのナイフはよく切れる。かれの頭の働きも、その小刀に劣らず鋭い。部落民は、まだ33才のこのバンレップ青年を、次代のトイマムと目して尊敬している。バンレップは、既にメッカ詣をすませ、またパタニのムスリム学校で学んだ経験をもち、その点ではやはり部落でも一級のムスリム型「インテリ」であ



写真 5 祈禱堂でコーランを朗読する
バンレップ青年

るのだ。しかし、かれがほかの連中と少し違っているのは、たとえばタイ語が皆目読めないトジレ爺さんなどと違い、タイ語がすらすら読めるし、それにおおかたその部落民にはわからないラジオ放送の言葉も完璧に理解する点である。アーマッドは、このバンレップ青年をなぜか苦手としている。

ある日の午後、茶店で、このふたりがばったり出会い、喋り好きのふたりは、馬糞臭い紅茶をのみながら話しはじめた。私は、傍で、一部始終を聴いていた。ふたりは、ふとしたきっかけから、khwa'm charə'n (進歩)とはなんぞや、という珍しく高まいた議論をはじめた。私が、そういう話題に導いたのだったかも知れない。アーマッドもバンレップも、いかにもインテリらしく、khy'wa' (つまり)という言葉を経度もつかったあげくひとつの共通した結論に達した。かれらは、「khwa'm charə'n とは、われわれが tha'na をあげることである」と表現した。tha'na とは、身分とか地位とかいうニュアンスの言葉である。ふたりは、奇しくも同じ考えに至ったようだったが、その実、心の底の思惑は少しずつ喰い違っていたのだった。というのは、「tha'na を上げる」ということの意味を、バンレップ青年のほうは、メッカに行った

り、ポノ(私設の宗教学校)を開いたりすること、と考えていたのにたいし、アーマッドのほうは、同じ表現で、たとえばヨク村長のような tha'na の獲得を考えていたのだった。つまり、バンレップは、あくまでも宗教的論理において tha'na の高低を考えるのに反し、アーマッドは、脱宗教的な社会論理においてそれを捉えようとしたのだ。しかし、だれの tha'na を問題にするのか、社会にどんな tha'na がありうるのか、tha'na を上げるにはどうしたらいいのか、バンレップにもアーマッドにも、そこまで掘り下げる訓練はできていないようであった。

それから2, 3日して、アーマッドの親戚の家に不幸があった。ひとりの中年者が子供を残して死んだのだった。1週間後、トイマムの手で遺産分割がなされ、以下のような具合に4人の子供が遺産を受けた。

宅 地 水 田 水 田 畑 地

1. (女)	—	$2 \frac{1}{3}$	—	$2 \frac{2}{3}$
2. (男)	—	—	$1 \frac{1}{2}$	—
3. (男)	$\frac{1}{2}$	$2 \frac{1}{3}$	—	$2 \frac{2}{3}$
4. (男)	$\frac{1}{2}$	$2 \frac{1}{3}$	—	$2 \frac{2}{3}$ (単位: ライ)

そばにいわせたアーマッドに、「土地の規模が小さくなったね」というと、「昔は、土地はとり放題だった。ひとりで50ライ、30ライの畑地をもつのはふつうだった。日本軍が来たころから、土地が値段をもつようになった。もう今では、ドンキレクには、未開墾の土地はないし、兄弟間でも土地は売買されている。」と、部落長らしく、事務的に返事した。しかし、アーマッドは、まだ余裕ありげな口ぶりだった。「俺の子供が大きくなる時分までは、土地には困ることはなからう。」

恐らく、アーマッドには、tha'na をあげることがどんなにたいへんな課題なのか、よくわかりっこないだろう。しかし、tha'na が上がらないからとて、kho phon する木も、もはやないのである。トイマムと仲良くするよりは、やはり酒に浸りたいだろうし、ヨク村長を憧れたがよくもあろう。アーマッド部落長は、やはり、よかれあしかれ、少し変わっているようだ。かれは、当年とって48才、まだ老い込む年令でもないから、これからもいろいろ変わったことをするだろう。そんな運命にある感じた。